AMDA
多様性の共存
ジャーナル

2018年10月25日 VOL.41 第287号 定価550円
発行／AMDA 〒700-0013 岡山市北区伊福町3-31-1
TEL 086-252-7700 FAX 086-252-7717
E-mail:member@amda.or.jp
郵便振替：01250-2-40709 口座名：特定非営利活動法人アムダ

2018年 秋号 秋

認定 特定非営利活動法人アムダ（AMDA）
http://amda.or.jp/
認定 特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構
http://www.amda-minds.org/
特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター
http://amda-imic.com/
AMDA 兵庫
http://amda-hyogo.com/

救える命があればどこへでも

北海道地震で「震度7」緊急医療チームを派遣

山肌があちこちで崩れ、地肌がむき出しとなった北海道厚真町。民家が土砂でつぶれ、生き埋めとなった人たちを救出する自衛隊員。9月6日、北海道胆振地方を震源とする震度7を記録した地震は死者が41人、北海道全域が停電となるなど大惨事となりました。

AMDAは震災翌日の7日、被災者のニーズを探るため調整員として本部職員2人を派遣。9、10日は最も被害の大きかった厚真町にAMDA支援農家グループの炊き出しチーム（5人）が出向きました。その後も医療調整員、看護師らを相次いで派遣するなど9月末まで、緊急事態への対応を進めました。

今も余震が断続的に続く北海道。復興は遠い道のりとなりそうです。

（広報担当参与　今井康人）

← 厚真中央小学校で活動するAMDA看護師

西日本豪雨から3カ月　今も戻らぬ日常生活

西日本豪雨の発生から10月6日で3カ月。鉄道網はほぼ復旧し、自治体が民間賃貸住宅を借り上げる「みなし仮設」などへの入居も進むなど、被災地は少しずつ復興へ向け進んでいます。一方で、依然として避難所に身を寄せる人もおり、生活再建にはなお時間がかかる見通しとなっています。（2頁に関連）

「100年に1回の大雨」

「晴れの国」岡山を含む西日本各地を襲った豪雨災害。被害直後にさかのぼると、異例ずくめのデータが浮かび上がってきます。まず7月6～8日、気象庁は「重大な危険が差し迫った異常事態」とした最大級の警戒を呼び掛けました。7月平年比の雨量は山陽地方（岡山、広島県）で216%。防災科学技術研究所は「100年に1回程度の非常にまれな大雨だった」と分析しています。

岡山地方気象台によると、一日雨量が県内25観測地点のうち7地点で観測史上最大を記録。避難所にも県全体で一時、2万5千人以上が身を寄せました。死者は61人。住宅7,500棟以上が全半壊し、家屋の風水害では戦後最悪の大惨事となったのです。

甚大な被害を受けた倉敷市真備町

「被災地を勇気づけたボランティア」

AMDAは7月7日から被災者支援活動を開始。8月31日までの活動期間中、派遣者総数は医師、看護師、鍼灸師ら265人（学生ボランティアを含む）。災害時の連携協力協定を結んでいる岡山県赤磐市、高知県黒潮町、徳島県海陽町・阿南市・美波町からも駆けつけて頂きました。全国でも珍しい総合移動健診車（瀬戸健康管理研究所提供）や移動調剤車（総社・アイ薬局提供）も活躍しました。岡山県社会福祉協議会によると、ボランティアは被災後1カ月間で県内外から延べ4万6千人にのぼり、被災者を勇気づけました。被災地の復興はこれからが本番。AMDAをはじめ、皆様の息の長い見守りが欠かせません。

（広報担当参与・今井康人）

総社市下原地区にて活動するAMDA調整員と総社市ボランティア

西日本豪雨　医師、看護師、鍼灸師ら献身的な取り組み

西日本豪雨でAMDAの緊急救援（ER）ネットワークの医師、看護師、鍼灸師ら多数の医療関係者が、避難所などで献身的な取り組みをしました。医療関係者の声をご紹介します。　（広報担当参与・今井康人）

◇鈴記　好博さん（医師）

患者の方に「明日は誕生日ですね」と言葉をかけたら、声を出していつまでも笑い続け「私も忘れていた。心の中に違う風が吹いた。ありがとう」と言ってもらった。

◇堀内　美由紀さん（看護師）

機会に触れ「少し休憩をしたら」と声掛けをしていた被災者の方が、私が任務を終えてあいさつに伺うと、急に「私を一番理解してくれた」と涙され手を握られた。看護師としての仕事ができたかもと思った瞬間だった。

◇小林　大祐さん（鍼灸師）

「家を片付けたからといって、また住めるかどうかは分からない。かといって、放っておくのも辛い」。端的な言葉だったが、被災に対するやりきれない気持ちを感じた一言だった。

◇河田　里奈さん（保健師）

問診の中で肩痛や肩こり、不眠を訴える方が多く、疲労やストレスが窺えた。鍼灸治療の後、すっきりとした表情になられ、こちらも嬉しくなった。

◇藤本　瑞穂さん（調整員）

体調不良を訴える被災者が多かった。連日の炎天下での家屋の片づけで、心身ともに衰弱している様子がほぼ全員に見られた。

福島からボランティア　猛暑のなか奮闘

一般社団法人Bridge for Fukushima（福島市五月町）は8月14、15日、西日本豪雨の被災地・倉敷市真備町でゴミ出しや水抜き、泥かきなどハードな作業に取り組みました。AMDAの活動に協力をして頂いたもので、参加した男女6人（20～30歳）に聞き取りした感想を紹介します。　（広報担当参与・今井康人）

◆水抜きに約2時間。気温が高く体調管理のため活動制限があったので、思い通りできなかった。微力で申し訳ない。

◆最初に20分動いて10分休憩をとる予定だったが、実際はもっと頻繁に休まないと動けなかった。

◆けが防止のため長袖、長ズボンで入ったが、かなり暑かった。熱中症予防もあり、服装選びは難しいと思った。

◆暑さが堪え、とてもハードな作業だった。仲間同士で気を付け合った。

◆決して「大丈夫」と言わないこと。自分が倒れては迷惑をかけることになる。

◆今回の体験で学び取ったことを今後、他人と共有する必要がある。

【メモ】Bridge for Fukushima　福島県（県北・相双地区）の抱える課題を解決するため、首都圏とBridge（かけはし）となることをミッションとしています。2011年5月に設立、ボランティアは約30人。

復興への底力とネットワーク

＊理事長　菅波　茂

倉敷市真備町や総社市など西日本集中豪雨被災者の方々には復興の推進を心から祈念いたします。気候変動による災害の特徴の一つが集中豪雨です。岡山は災害のない地域と言われてきました。確かに、全国に2ケ所しかない「地下マグマが少なく地震が発生しにくい場所」であることは事実ですが、河川と山がある限り集中豪雨による災害が発生するという過酷な現実に直面しました。

総社市は2013年12月の災害支援条例の制定以前から、AMDAと共に全国の災害発生地の被災者の方々の支援に尽力してきました。その総社市自体が今回の集中豪雨により被災しました。「情けは人の為ならず、義理となって返ってくる」と感動しました。なぜなら、総社市が過去に支援をしたすべての自治体から人的及び物的支援を受けたのです。加えて、2015年6月に発足して活動をしている「AMDA南海トラフ災害対応プラットフォーム」に参加する自治体、医療機関そして経済界の団体などからも温かい支援がありました。

更に驚いたことは、高校生など次世代の若者が倉敷や総社市で意欲的にボランティアとして参加したことです。「人間かくあるべき」という学びと「誰でも他人の役に立ちたい気持ちがある」という人としての本来の在り方がこのような活動に結びついたと思います。

日本全国が、被災経験を奇貨として、信頼にもとづいた相互扶助のネットワークで結ばれていくことにAMDAが少しでもお役に立つことができれば望外の喜びです。

モンゴル眼科事業、10年間の活動を終了

AMDAのモンゴルにおける眼科事業は2009年から始まり、2010年には白内障手術の無償提供、2010年より本年夏まで子どもの目を守る事業を毎年、モンゴル眼科協会等と共同で行ってきました。今年も8月27日から9月4日まで、川崎医療福祉大学医療技術学部感覚矯正学科教授、高﨑裕子先生と学生4名、カナダ在住視能訓練士、守田好江先生が中心となり、ウランバートル市から400Km、車で8時間かかるブルガン県の2つの小学校とヒシグンドゥル村で286人、そして、ウランバートル市の隣の地区、ソンギノハイルハン区で254人の生徒の眼科健診を行いました。小学校の6歳の子ども2割に目に何等かの問題があり、半数は眼鏡で対応できること、そして、弱視や斜視などの病気が世界的なレベルで見ても多いことなどを、保健省ならびに日本大使館で報告をしました。保健省副大臣より、AMDAの長年の活動への感謝が述べられ、二人の先生方とAMDAに感謝状が手渡されました。昨年、9月第三日曜日を子どもの目の日として正式に正式に制定されたことを受け、AMDAとしては一定の役割を果たしたとし、今年で眼科事業を終了することにしました。今年は、菅波代表が、エンフボルド国家大会議議長に直接面会し、眼科健診継続の必要性を説明しました。これまで眼科健診を受けた子どもの数は、延べ1,563人、眼科の専門研修を受けた地元医師は、延べ299人となりました。　（GPSP支援局長　難波　妙）

眼科健診を行う高﨑裕子先生

佐藤医師　モンゴルで救急医療セミナーを実施、記念シンポジウムで講演

昨年9月に引き続き、東亜大学医療学部教授、佐藤拓史医師による救命救急についてのセミナーが9月17日、18日の両日、ウランバートル、救急医療サービスセンターで行われました。同センターの主力10名の医師を対象に、モンゴルの救急の現場ではまだ実施されていない骨髄輸液、輪状甲状靭帯切開術、心タンポナーデの治療についての研修を行いました。

モンゴルでは、医師が救急車に同乗します。従って、速やかに上記の治療が現場でできれば、救命率は確実に上がります。今回、実際に鶏肉の骨を使って骨髄輸液の手技を一人一人の医師が実体験しました。また、輪状甲状靭帯切開の手技や心嚢穿刺、心膜開窓術の技術をシミュレーターで学びました。セミナーを終えたトレーニング担当課長は、来年は是非ウランバートルだけでなく郊外の救命救急医にもセミナーを行いたいと、更なる意欲を語りました。研修を終えた救急医たちは皆自信に満ちた表情になり、佐藤医師への感謝を表していました。

救命救急についてのセミナーを行う佐藤拓史医師

19日には、ウランバートル保健局80周年記念シンポジウムに招待された佐藤医師は、災害時の感染症対策について、熊本とハイチでの救援活動の経験を200名の参加者を前に発表しました。その内容は翌日の地元紙にも掲載されました。（GPSP支援局長　難波　妙）

あふれるロヒンギャ難民　受診者3万人超す

依然多くのロヒンギャ難民が身を寄せるバングラデシュ南部コックスバザール近郊のクトゥパロン難民キャンプは多数の難民で混雑しています。難民の一部は新たに拡張された敷地に移っており、衛生面や水、医療面における支援は常に喫緊の課題となっています。AMDAバングラデシュは、日本バングラデシュ友好病院や現地銀行UCBと協力して、昨年10月にキャンプ内に仮設診療所を開設。疾病の治療、薬の処方、妊産婦ケアなどを行う一方、心身に障がいを抱える難民にも対応しています。開所以来、受診者数は延べ31,000人を超え、この夏には診療所家屋の移設と建て直しを行いました。また、最近は活動の様子が現地メディアに取り上げられ、障がい者やダウン症の難民に対する取り組みが報じられました。　（バングラデシュ担当　橋本　千明）

連載インタビュー「支える喜び」シリーズ 第18回
岡山・倉敷フィリピーノサークル相談役　大山 マージョリー 様

AMDAを支えてくださっている支援者の皆様に、インタビュー形式で様々なエピソードをお伺いしている「支える喜びシリーズ」。18回目となる今回は、倉敷市玉島勇崎の岡山・倉敷フィリピーノサークル（OPKC）の相談役（元代表）として、AMDAの活動にご支援を頂いている大山マージョリーさんにお話を伺いました。

（聞き手・今井康人）

AMDA　早速ですが、西日本豪雨ではAMDAの支援活動を支えて頂き、ありがとうございました。

大山　被災後の8日間、私を含めOPKCの女子会員3人が順次現地入りし、ガラスの破片が散らばった公民館の清掃や熱中症患者の救急車手配、AMDA看護師のアシストなどに取り組みました。

AMDA　猛暑の中、大変でしたね。

大山　これまで祖国フィリピンが被災した際、AMDAはたびたび職員らを派遣してくださいました。AMDAには感謝の気持ちでいっぱいです。「今がその恩返しの時だ」と思って頑張りました。菅波代表がいつも話されている「困った時はお互いさま」の“相互扶助”の理念を実行しただけです。AMDAと一緒にフィリピンへの支援を求める街頭募金をしたことも良い思い出です。

AMDA　被災地を見たときはどうのように感じましたか。

大山　「ここが本当に日本なの？」と思わず叫びました。心とおなかに痛みが走り、早く支援をしなければ、と焦りも感じました。

AMDA　ところで、大山さんはいつから日本にお住まいですか。

大山　日本人の夫と結婚した直後の1999年1月から井原市上出部町に住んでいます。自然の豊かなところで、特に四季の移り変わりは感動的。いつも景色を見ながら神様に感謝しています。男の子2人にも恵まれ、幸せに暮らしています。

AMDA　OPKCの設立趣旨を教えてください。

大山　フィリピンと日本の国際文化交流など3項目を目標に2001年に設立。当時は会員7人でしたが、現在は岡山県内に約40人います。

AMDA　AMDAとの本格的な関わりは。

大山　菅波代表の依頼を受け、2008年にフィリピンの台風被害でAMDAと一緒に現地を訪れてからです。私は調整員兼通訳を務めました。その後、10回程度、AMDAから祖国の復興のために緊急支援チームを派遣してもらっています。

AMDA　フィリピンは熱帯性気候で、太平洋に浮かぶ7千を超す島々からなり、エメラルドグリーンに輝くビーチが人気と日本の観光雑誌に紹介されています。両国の政治関係も極めて良好で、2011年9月には「戦略的パートナーシップ」に位置づけされています。

大山　ますます両国が発展すると良いですね。私が今、取り組みたいのは祖国の食事内容の改善です。国民は野菜をあまり食べず、栄養バランスが悪い。平均寿命は短く、男性で65歳、女性で72歳程度です。学校では給食もなく、もっと日本の食文化を紹介していきたいと思っています。日本の皆様のご協力をよろしくお願いします。

フィリピンミンダナオ島での緊急救援活動より

グロリア・メルカド　フィリピン大統領府長官筆頭秘書官

AMDAの「開かれた相互扶助」を私達の国では「バヤニハン」といい、血縁関係を超えて家族のように助け合うことです。特に災害救援で、私のチームと活動する大山さんはこれを体現しており、義務ではなくボランティアとして祖国のために活躍しています。

（インタビュー内の敬称は省略させていただきました）

海外で自然が猛威　台風・地震に緊急支援

インド　ケララ州緊急救援活動

8月初旬より2週間降り続いた南西モンスーンによる豪雨で、インド連邦南部ケララ州と近隣州に100年に一度と形容される大洪水と地すべりが発生。特にケララ州では州内にある全14県が被災しました。国連人道支援問題調整所（UNOCHA）によると、ケララ州における洪水による死者は503人、行方不明者15人、負傷者140人、全壊家屋は1,952軒、一部損壊家屋21,964軒、被災人口は540万人以上にのぼりました。

AMDAは8月25日から9月8日まで、インド、ネパール、日本のメンバー計11人からなる多国籍医療医師団を結成し、現地協力団体とともにケララ州アルプザ県とカルナタカ州コダグ県で医療支援と物資支援を行いました。医療支援では現地団体セワバルティ、コダグ県と協力し計566人の患者を診察。風邪の症状、皮膚の掻痒感、家の片付けによると思われる腰痛が主な症状で，加えてレプトスピラ症の発生が報告されていたため、予防をする目的で抗生剤も処方されていました。物資支援では、現地団体チェンガヌールロータリークラブと協力し事前調査を行い、そのニーズにもとづき調理器具の支援を4村198世帯に配布。加えてアンディカル地区政府高等学校に通う被災した生徒50人に対して学校カバンとノート5冊を配布しました。

支援物資を配布するAMDA調整員

被災者の多くは家が1階や2階まで浸水し、地元警察や漁師を中心としたチームに救助され、近くの学校、宗教施設、公会堂などに避難しました。救助活動に参加した漁師は「スマトラの津波に遭ったころは、自分がまだ小学生だったから何もできなかった。ただ支援を受けたことは理解していた。自分の村でも津波で10人が亡くなるという悲しい思いをしたが、色んな方の支援で復興してきた。今回、自分たちに何かできるとわかった時、是非人々を助けたいと思った」と語りました。（インド担当　岩尾　智子）

インドネシア　ロンボク島地震緊急医療支援活動

7月29日インドネシア、ロンボク島を震源とするマグニチュード(M)6.4の地震を受け、AMDAインドネシア支部は8月1日、医師2人、AMSA（アジア医学生連絡協議会）のメンバー1人を含む医療チームを派遣、被災者に巡回診療等を行いました。そして彼らの活動期間であった5日夜、同島でM7.0の地震が発生。チームは翌朝マタラム州の病院へ向かい、患者が病院駐車場まであふれる様子を見て、同病院の外科手術に麻酔科医として参加、3日間で約30人の手術に携わりました。

インドネシア医療チームと菅波理事長

この甚大な被害状況に同支部は2次派遣を決定、手術協力等のニーズを考え、1次チームと交代で麻酔科医3人とAMSAのメンバー1人を7日に派遣。2次チームは病院での手術協力に加え、避難所での診療、物資支援等を実施しました。今回の派遣者は派遣後に「病院勤務ではできない、非常に貴重な経験が出来た」と語りました。

また、16日には菅波茂AMDA理事長とタンラAMDAインドネシア支部長が活動地を訪問、食料や飲料などを現地自治体に支援しました。今回の地震により死者が460人以上、7,000人以上が負傷したと発表されています。更に、9月28日にはスラウェシ島でM7.7の地震及び津波が発生、インドネシア支部と日本からも医療チームを派遣しています。

（GPSP支援局総務担当　ブルックス　雅美）

フィリピン　災害支援活動

9月中旬より相次いでフィリピンを襲った台風やモンスーンによる豪雨は、多くの人に甚大な被害をもたらしました。複数の現地協力者より協力要請を受け、AMDA調整員1名を現地に派遣しました。フィリピン台風22号被害の大きかったベンゲット州と洪水被害のあったパンガシナン州、モンスーン豪雨による地すべり被害の大きかったセブ州ナガ市を訪れ、被災者に対する支援活動を行いました。

（フィリピン担当　岩尾　智子）

支援物資を配布するAMDA調整員

新庄中学校の生徒がネパール大使館訪問

7月30日、岡山県新庄村立新庄中学校の生徒5人がAMDA職員の引率で、東京の在日ネパール大使館とインドネシア大使館を訪問しました。この訪問は、日本以外の人と英語でのコミュニケーションを通し、中学生に知識を広げ国際理解を深めてもらうことを目的としています。

中学生たちは、パネルを使用し英語で新庄村と中学校について説明しました。パルティバー在日ネパール大使は発表を興味深く聞き「日本の子どもたちは恵まれている。都会に住んでいても地方に住んでいても平等に教育を受けられることは素晴らしいことだ」と話されました。インドネシア大使館では、教育担当のリンダさんは「日本の田舎の素晴らしさに感動した。行ってみたくなった」と話されました。中学生からは「ネパールとインドネシアのことをいろいろ理解できた。学んだことを将来に生かしたい」という感想がありました。（ネパール担当　アルチャナ・ジョシ）

多くの方々からご寄付をいただきました。一部を紹介します。

倉敷アカデミックウィンズ 様

岡山大学学生有志御一同 様

関西モンゴル人会 様

有限会社　創和 様

こども大使が奮闘　AMDA スリランカ平和構築プログラム

スリランカにおいて 1983 年から 26 年間続いたシンハラ、タミル間の民族間の内戦中 AMDA は医療和平として対立する 2 つの民族とムスリムの地域へ平等に医療と健康教育を行いました。内戦終了後医療和平の再開と並行して現地の若者によるスポーツや文化交流を中心とした平和構築プログラムが 2011 年から始まりました。2015 年から AMDA 中学高校生会も加わり活動を継続しています。今年は AMDA 中学高校生会 4 名の他岡山県赤磐市の中学生 5 名、広島県立福山誠之館高校生 2 名、合計 11 名が参加しました。今年はスリランカ北東部のポロンナルワで 8 月 3 日～ 5 日の 3 日間、開催しました。

現地生徒と交流する日本チーム

特別ゲストとして友實武則赤磐市長が 2 日目の午後から参加され、ポロンナルワでの活動の様子を視察されました。スリランカからはポロンナルワ、キリノッチ、ムトゥール（トリンコマリー）、マータレ―の各学校から 24 名ずつ参加し、関係者を合わせると合計 125 名の大きなプログラムになりました。

プログラム 2 日目の早朝に活動地のロイヤル セントラル カレッジポロンナルワのグラウンドへ、シリセーナスリランカ大統領がウォーキングの途中に立ち寄られました。AMDA スリランカからの要請に応えてくださったのですが、サマラゲ AMDA スリランカ支部長からのプログラムの説明や、短い時間でしたが会話に応じていただき、最後に記念撮影をさせていただきました。

3 日間のプログラムは毎年行っている宗教プログラム、スポーツプログラム、文化交流プログラム以外にも今年は、平和について取り組むプログラムに時間を割き、日本チームから平和についてのプレゼンの他、参加者全員それぞれに平和への思いを絵に描き、発表し合うなどの活動を行いました。3 日間寝食を共にし、平和への思いや願いをみんなで共有し合うことができた今回のプログラムは充実していたと思います。

文化交流プログラムで発表する日本チーム

また今回、スリランカ政府機関で平和構築に関わる「国民和解局」を訪問し、福山誠之館高校の生徒より湯崎英彦広島県知事からの平和のメッセージをお渡ししました。

今回参加した生徒たちからの感想を紹介します。

- こちらが笑顔をもらった。
- 平和への思いを感じた。
- スリランカの生活について知ることができた。
- 笑顔の素晴らしさを再確認した。
- 宗教に対する理解
- 平和について多様な考えが聞けて充実していた。
- すごく楽しかった。別れの時泣いていたのが印象的だった
- 現地の生徒たちと明るく交流でき、日本で思いを共有したい。
- 現地の生徒たちは宗教のこと平和のことを自分と同じように考えていて嬉しかった。
- 英語を学ぶことは大事だがそれ以上に大切なのは伝えようとする気持ちだと思う。
- スリランカへ行くと素の自分になれる。言葉の壁を大きく感じた。皆にもっと伝えたい。
- 2 つの民族をつなぐことの難しさを感じた。でも昨年に比べ今年は 1 つステップが上がった。

（AMDA ボランティアセンター事務局長　竹谷　和子）

編集後記　AMDA の職員やボランティアが街頭に出て住民とふれあう“まちかどトーク”。2017 年 8 月から、西日本豪雨など緊急事態を除き、毎月 1 回程度、実施しています。

住民の声に謙虚に耳を傾け、住民とともに歩む AMDA を目指すのが狙いです。

住民からは「海外の危険地域へ支援に飛び出す職員に頭が下がる」（40 代男性）、「活動ぶりをテレビで見て涙が出た」（60 代女性）―など好意的な声を頂いています。

ただ、大半が街頭を足早に歩く方々が対象となり、注文や提言など踏み込んだ意見が聞けないのが悩みです。

今後、さらに知恵を絞り、本音のトークを目指します。今回のジャーナル（秋号）が今年最後の発行となります。お世話になりました。心から感謝を申し上げます。

（広報担当参与・今井康人）